共同運営部門：リハビリテーションセンター

―関係部署―

役　　職	スタッフ名
センター長兼リハビリテーション科部長	小野　秀文
部門長代理兼科長代理（理学療法士）	津野　光昭
科長代理（理学療法士）	石田　恭子
主幹（理学療法士）	大野　直紀
主査（作業療法士）	藤田　将敬
主査（言語聴覚士）	一柳　律子

【スタッフ数】2022年3月現在
医師:1名　理学療法士:25名　作業療法士:10名
言語聴覚士:6名　事務員:3名　　計:45名

―概要―

リハビリテーション科では理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の3職種が、発症後(手術後)早期より医師・看護師等の他職種と連携を図りながら、早期離床・日常生活動作の獲得・廃用症候群や呼吸器合併症の予防・摂食嚥下機能の改善を目的にリハビリテーションを実施している。患者に対し継続したリハビリテーションを提供する為、土、日、祝日にも継続したリハビリテーションを施行している。入院患者以外では、外来の心臓リハビリテーションの実施にも積極的に取り組むと共に、日常生活、栄養なども含めた総合的な指導も併せて実施している。

【理学療法部門】

理学療法部門では、各診療科において急性期の患者を中心に入院直後より積極的な介入を行っている。入院患者以外にも外来の心臓リハビリテーションを毎日実施すると共に患者の個々の運動能力に応じた運動処方を行えるよう心肺運動負荷試験（CPX）の実施も行っている。また院内の活動では、呼吸サポートチーム、緩和ケアチーム、糖尿病教室や生活習慣病予防教室への参加を積極的に行っている。

【作業療法部門】

作業療法部門では、脳疾患部門、整形部門、集中治療部門の患者に対し、日常生活動作の改善や周術期におけるせん妄の改善を目標にリハビリテーションを施行している。それと共に日常生活動作の方法を安全に施行する為のパンフレットの作成や福祉用具の紹介、提供も行っている。また院内の活動では認知症サポートセンターへの参加を行い認知症患者への介入も行っている。

【言語聴覚部門】

言語聴覚部門では、脳血管障害の患者を中心に嚥下障害、高次脳機能障害、失語症へのリハビリテーションを実施している。院内の活動では、病棟看護師と協力し摂食嚥下療法にも取り組むと共に、病棟スタッフに対し摂食嚥下の教育も行っている。

―実績―

(表1)　　2021年度リハビリテーション科実績

	実施延べ人数	実施単位数
理学療法部門	46,929名	77,587単位
作業療法部門	21,490名	37,443単位
言語聴覚部門	11,255名	14,459単位
心臓リハ外来	777名	2,331単位

リハビリテーション部門全体では昨年度とほぼ同様(昨年比99％)の実施単位数であった。2021年度は作業療法部門、言語聴覚部門において実施単位数の増加を認めた。

―今年度の成果と反省点―

今年度も昨年度と同様にコロナウイルスの患者に対し理学療法士を中心として積極的なリハビリ介入を行った。介入の際は、医師・看護師と密な連携を取ると共にリハビリスタッフも徹底した感染予防を実施し介入を行った。理学療法部門では、人材の育成を目標に挙げ教育を実践した。それにより集中治療領域に対応したセラピストの拡充を図ることができた。作業療法部門では、認知症ケアセンターへの参加を積極的行うと共に泉佐野市での認知症事業にも継続して職員を派遣することで行政との密接な関わりを構築することが出来た。言語聴覚部門では、他部門と共同し摂食嚥下ワーキンググループの活動を行っている。各患者のベッドサイドに『食べるときの注意点』のパンフレットを掲示し統一した嚥下の実践を行うことが出来た。またVF、VEの検査も積極的に実施している。各部門では昨年度と同様に業務の効率化を目標に臨床業務を実施した。医師(リハ医)が事前に評価を行い介入時期の検討を行うことで適切な介入時期、介入時間を確保することが出来た。今年度の反省としてコロナウイルスの影響により患者へのセルフケアへの介入が昨年度と同様に不十分であったと考える。

―来年度への抱負―

来年度の抱負として理学療法部門では、周術期の患者に対し質の高いリハビリテーションを提供していきたいと考える。作業療法部門では、救命領域での介入方法を検討し患者のせん妄予防に努めていく。また言語聴覚部門では、摂食嚥下の評価を更に充実させ各病棟での摂食嚥下での算定向上に努めていきたいと考える。